

中国人留学生に対する SPOT の試用結果

Use of SPOT (Simple Performance Oriented Test) for Chinese Students of Japanese

佐藤 福子
Sato Fukuko
谷口 亮子
Taniguchi Ryoko

1. はじめに

SPOT は Simple Performance-Oriented Test の略で、日本語能力簡易試験とも呼ばれている。筑波大学で「簡単に短時間で日本語能力を測定することを目的として開発された実用的なテスト」(フォード・丹羽・小林・山元 1995)で、総合的日本語能力との高い相関も報告されている。

SPOT は一つの文の中の文法項目に関わる部分一ヶ所を欠落させた問題文(例 そこ()何をしてるんですか。)から成り、被験者はテープの音声を聞きながら、各文中の欠落部分()の中にひらがな1文字を書き込んでいく。本稿で試行した SPOT は2種類で、SPOT/A(難易度が高い)は65問、SPOT/B(難易度が低い)は60問の問題文で構成されているが、各々の問題文には関連性がなく、文脈もない。また問題文が読み終わられて、次の問題文が読まれるまでのポーズは2秒間と短く、読み上げられる速度は自然でノイズもない。これは、「学習者が自分の知っていることは聞き取れるが、知らないことは聞き取りにくいことを利用し」(小林・フォード 1992)考案されたテストで、約10分程度で言語行動の即時的な遂行力を測ることができるとされている。

本校の留学生はそのほとんどを中国人留学生が占めており、今年度は中国での現地入学試験の結果により31名、日本国内での入学試験により17名を受け入れ、計48名が学部生として学んでいる。今回はその中国人留学生に対して SPOT を課し、本校のプレースメントテストとの相関を調べ、今後の導入の可能性を探ってみたい。また、誤用の結果を分析し、中国人学習者の誤用の傾向を知る一助としたい。

2. 先行研究

SPOT に関する研究は、筑波大学を中心に数多くなされてきた。その先駆けとなったのは、小林・フォード(1992)による研究で、筑波大学で使用されていた聞き取りテスト(SPOT の前身)とプレースメントテストにおける文法テストとの高い相関関係から、理解している文法は聞き取る

ことができ、理解していない文法はテープから聞こえても聞き取れないことを明らかにした。つまり、文の一部分を正しく聞き取るためには、その文全体を理解できなければならないことが示されたのである。この結果、この聞き取りテストをプレースメントテストとして使用する可能性を模索する試みが始まった。

SPOT 問題文の表記法とテストパフォーマンスの関係については、小林・丹羽・山元(1994)が、漢字仮名交じりタイプ、平仮名だけのタイプの2形式と被験者の漢字能力の差に有意な関係があることを示した。また、関(1996)は、韓国人母語話者に対する SPOT の試用から、漢字仮名交じり形式と漢字仮名交じり・分かち書き形式では、漢字仮名交じり・分かち書き形式のほうが正答率が高かったことを報告している。

SPOT の難易度については、小林・フォード・山元(1995)が SPOT の難易度と筑波大学で行われているプレースメントテストの成績上位群・下位群との関係について調べている。その結果、難易度の高い SPOT は、成績上位群をよく識別するが下位群はあまり識別できないこと、その逆に、難易度の低い SPOT は、成績下位群の識別はするが、成績上位群については多数が高得点域に集中する天井効果を示すことが分かった。

SPOT の誤答の傾向に母語の影響が見られることを示した研究としては、関(1996)や酒井・フォード(1997)が、各母語の影響について具体的な誤答例を挙げて示している。また、小林・山元(1997)は SPOT の結果とプレースメントテストの結果に著しい違いが見られる学習者に焦点を当て、SPOT に比べてプレースメントテストの文法得点が相対的に低い、というタイプは成績上位の韓国語話者に多く、プレースメントテストに対して SPOT が相対的に低いタイプは中国語話者全般、SPOT は非常に低いが、プレースメントテストの文法だけは多少得点しているのは成績下位群の非漢字圏話者に多い、といった学習者の特性と SPOT 得点の関連の一側面を明らかにした。

SPOT の結果から学習者の文法習得状況をみる試みも行われた。SPOT の解答を日本語文法能力集団別に見ること

で、フォード・小林（1993）は、それぞれのレベルの集団がどんな文法項目を習得しているか、あるいは習得していないか分析した。當作（1998）は、カリフォルニア大学サンディエゴ校において、SPOTの正答率と練習度合い（学習者がある文法項目とどれくらいコンタクトがあったか）や出現度合い（教科書にどれくらい出てきたか）を合わせた数値との関係を調査し、それぞれの文法項目の習得度を調査した。このことは、短時間で簡単に文法項目の習得度合いを調べる道具としてSPOTが使える可能性を示唆している。

SPOTはアイオワ大学（畑佐1998）、北海道大学（小林1998）、名古屋大学（村上1998）などでも試用され、それぞれの大学のプレースメントテストと一定の相関を示している。

3. 本研究にいたる経緯

本校の日本語授業は一つの科目についてレベル別に3クラスずつ設けているが、まず暫定的に入学試験の成績で3つのレベルに分け、その後、筆記試験、インタビュー、作文を課してクラスを決定している。この方法は長時間を要し採点も非常に煩雑である。また、暫定的とはいえ、レベルチェックの目安として使用している入学試験が、国内入試と海外入試では問題を統一することができず、担当者として困難を抱えている。これは、中国での現地入学試験がまだ2年目と歴史も浅く、国内入試に使用している日本留学試験が中国ではまだ採用されていないため、海外では本校独自の入学試験を行わざるを得ない状況にあるためである。また、海外入試は複数の地域、担当者で行なわれるため、合格した学生のレベルが均一であるとは言い切れない事情もある。

本校では留学生は学部生として入学し、1年次より全学生がゼミに所属することになっているので、レポートや発表のために、作文はクラス分けには大きな要素となっている。

以上のようなことから、効率的で有効なプレースメントテストの確立が急務であるため、SPOTを試用し本校の入学試験と、プレースメントの一部としての作文とのそれぞれの相関を調べることにした。SPOTと産出力との相関をみる研究はまだなされていないが、本稿ではその産出力との相関についても分析を試みる。

4. 目的と方法

4.1 目的

- ・ 入学試験（日本語）、プレースメントテスト（作文）とSPOTとの相関を調べ、SPOTの本校プレースメントテストとしての導入の可能性をみる。

- ・ SPOTの結果を精査し、誤用の傾向を分析する。

4.2 対象

金沢星稜大学で日本語を履修する1年次の中国人留学生43名

4.3 方法

入学試験、プレースメントテストの一部である課題作文のそれぞれの結果と、SPOTの結果との相関を調べて分析し、誤用を「音」「文法・語彙」「表記」等様々な点から検証し、傾向を分析する。

前述の通り諸々の事情により、本校は日本語に関して、国内で行なわれる入学試験と海外で行われる入学試験の統一がなされていない。そのため、国内、海外のそれぞれの試験結果とSPOT/A・Bの結果との相関をみた。作文に関しては、課題作文の結果を素点で表して、国内入試組、海外入試組各々の結果とSPOT/A・Bとの相関をみた。また、国内入試組と海外入試組をあわせて、SPOT/A・Bの結果との相関を分析した。

作文の採点は日本留学試験の記述問題の「採点基準」を参考に「課題作文採点スケール」（資料参照）を作成し、文法能力（0～3点）と論理的能力（0～3点）を0.5点きざみで担当者二人が各々全学生の作文を採点した。学生の得点は担当者二人の素点の平均とし、担当者間に2点以上の差が見られた時は、協議して再度採点した。

SPOTの誤りはA・Bそれぞれに関して、間違えた原因と推測される項目として「表記」「音」「清濁音」「文法・語彙」の4項目に分類、整理し、各々の項目を後述のとおり更に細かく分類して分析を試みた。なお、本稿で言う「表記」「音」「清濁音」「文法・語彙」の誤りとは以下のようなものとする。

・「表記」の誤り

「本（お）読みます。」のように[o]として正しく認識したが、何らかの理由により書き誤ったと思われるものや、「（あ）ります。」とすべきところを「（り）ります。」のように、聞き誤るとは考えにくい音を何らかの理由で書き誤ったと考えられるものを分類した。

・「音」の誤り

「どこに（も）」を「どこに（の）」としたように、母音にひきずられたと考えられるものや、あるいは、「しか（ら）れました。」を「しか（な）れました。」としたように、聴解が原因で間違えた可能性が強いと考えられるものを分類した。

・「清濁音」の誤り

対象が中国人留学生であるため、中国人によく見られる間違いということから、特に清音と濁音の違いにつ

いて分類項目を設けた。

・「文法・語彙」の誤り

主に文法、語彙的な知識から生じた誤り、あるいはそれらの知識の不足から生じた誤りを分類した。例えば、「雨がふ(る) そうです」を「雨がふ(り) そうです」としたものの、「どこ(か) 行きませんか」を「どこ(に) 行きませんか」として間違えたものがあげられる。

さらに、空欄も含めて誤用数の多かったものを A・B からそれぞれ 10 例ほどとり出して分析を試みた。誤用の詳細については後述する。

5. 結果と考察

5. 1 相関と考察

TABLE 1 (海外入試組+国内入試組)

	SPOT/A	SPOT/B
平均	43.62 (67%)	48.3 (81%)
標準偏差	13.02	10.78
作文との相関関係	0.73	0.70

※ 海外入試組と国内入試組は異なる入学試験を受けているので、ここでは入学試験と SPOT の相関はみない。

TABLE 2 海外入試による入学者 (海外入試組)

	SPOT/A	SPOT/B
平均	44.03 (68%)	48.24 (80%)
標準偏差	13.42	11.48
作文との相関関係	0.75	0.67
入試との相関関係	0.46	0.45

- ・作文と難易度の低い SPOT/B にやや弱い相関、作文と難易度の高い SPOT/A にやや強い相関がある。SPOT で産出力が測れるのか、という点については未知数であるが、産出力を要する作文と SPOT との間に相関がみられたことは、少なくとも海外入試組については、SPOT の結果から産出力も推測できる可能性を示唆している。
- ・海外入試と SPOT の間に相関は見られなかった。海外入試には聴解を測る問題がなく、聴くことが重要な活動となる SPOT と相関が見られない理由の一つであると推測される。

TABLE 3 国内入試による入学者 (国内入試組)

	SPOT/A	SPOT/B
平均	45.1 (69%)	50.8 (85%)
標準偏差	9.62	5.09
作文との相関関係	0.52	0.41
入試との相関関係	0.59	0.64

- ・国内入試組は海外入試組に比べて SPOT の平均がやや

高い。1 年以上国内に滞在していた国内入試組に対し、海外入試組は全員初来日で、彼らが SPOT を受けたのは来日 2 週間後の授業内であった。海外入試組が日本語をナチュラルスピードで聞くことにまだ慣れていなかったことがこの点数差の原因ではないと思われる。

- ・作文と SPOT/B には相関がなく、SPOT/A でもやや弱い相関しかない。海外入試組と比べると、相関係数が低いことがわかる。これは、本校入学前の学習歴と学習環境の違いによるものと思われる。海外入試組はテキストや学習時間数などほぼ同様な日本語環境にあった。一方国内入試組は全員が来日 1 年以上経過しており、様々な日本語経験（アルバイト、日本語教育機関での学習など）を経て各々個人差（例えば、聞き取りは得意だが作文は苦手、作文は得意だが語彙力がない、といった個人差）が生じてきていることが原因の一つではないかと推測される。
- ・国内入試と SPOT にはやや弱い相関がみられる。本校では、国内入試組は日本留学試験の結果により選抜している。聴解が重要な活動となる日本留学試験で高得点を得た者は、やはり聴解が重要となる SPOT でも高得点を得たのではないかと考えられる。

5. 2 誤答の分析

5. 2. 1 表記

A. お／を、わ／は のミス

よく読んで（お）いてください→（を）いてください
わからない（わ）けです→（は）けです

- ・お／を、わ／はの混同が、mistake なのか、error なのか判断できない。

B. 同じ文字が 2 度繰り返されている

（あ）ります→（り）ります
（て）いえば→（い）いえば
て（い）く一方→て（て）く一方

- ・「りります」「いえば」「ててく一方」と聞こえたのではなく、ナチュラルスピードの日本語を聞いて次々と空欄を埋めていくという、心理的にプレッシャーのかかる状態の中、空欄の前後で聞こえた音を適当に書き入れただけではないと思われる。

C. 漢字を書き入れている

～た（ほ）うがいい→（方）
60（だ）し→（代）

- ・ひらがなではなく漢字を書き入れてしまうというのは、中国人留学生に多い誤りと考えられる。

5. 2. 2 音

A. ら行とな行の混乱

しか（ら）れました→しか（な）れました
帰（ろ）うと→帰（の）うと

・授業内においてもこういった誤りは中国人留学生に多く見られた。

B. 母音に引きずられたミス

wo → no mo → no ri → i ni → i shi → i ho → mo

・母音のうち o と i に引きずられたミスが多く見られた。

C. 子音が残るミス

例) ma → mo me → mi

sa → so se → sa so → sa

・ま行、さ行において、母音を異にした誤答が多く見られた。

D. 母音が残るミス

例) yo → o, no

ka → ta

no → o, ko

wa → a

・母音のみが残る、あるいは、母音は残るが他の子音と組み合わせる誤答が見られた。

5. 2. 3 清濁

A. た行のミス

21 / 29 (SPOT/A・B 合わせて 29 の清濁ミス中 21)

B. か行のミス

6 / 29

C. さ行のミス

2 / 29

・中国人留学生によく見られる誤りと考えられる。筆者らは以前、中国人留学生の表記における清濁音の誤用分析を行ったことがあるが（金沢星稜大学論集第36巻 第3号）、SPOTで誤りの多くみられる「行」はその時の結果と同じであり、ハ行の清濁の混同が見られなかった点も同様である。上述の分析時には、清音の濁音表記化が濁音の清音表記化に比べてかなり多く現れていたが、SPOTの誤用では、濁音の清音表記化がやや多いものの、顕著な差は認められなかった。

5. 2. 4 文法・語彙

A. 名詞+助詞

名詞の後に助詞をつけることはできているが、入れるべき助詞を誤っている。

以下では、二種類以上の語答がみられたものを全て列記する。

SPOT/B

何が・・・何（を、は）

学生で・・・学生（の、が）

友だちが・・・友だち（の、は）

どこか・・・どこ（へ、で、に）

食堂で・・・食堂（を）

この道を・・・この道（が、に、は）

先生には・・・先生（と）は

カメラが・・・カメラ（を、は）

5つも・・・5つ（を）

友だちに・・・友だち（が）

SPOT/A

そこで・・・そこ（に）

となりの人に・・・となりの人（を）

グリーンのスカート・・・グリーン（と、を、な）

先生には・・・先生（が）は

～っていうのを・・・～っていうの（は、が）

コーヒーの美味しい店・・・コーヒー（で、が、は、を）

窓のところに・・・窓（が、に）

郵便局のところを・・・郵便局のところ（に、で）

好きな人でもいるの？・・・好きな人（に、の、は、が）も

肉の色が変わったら・・・肉の色（は、を）

約束してたのに・・・約束してたの（は、が）

茶色に見える・・・茶色（が、を、で）

留学生にとって・・・留学生（は、を、が、の）

子どもになんか・・・子ども（が）

外国人のあなたには・・・外国人（は、が）

彼に・・・彼（の、ら、へ、も）

立っている人が田中さんです・・・立っている人（は）田中さん

だれといっしょに・・・だれ（が）いっしょに

どこかいかない？・・・どこ（で、に）

新聞にでてたよ・・・新聞（で、を）

・様々な助詞の誤答が見られ、特に多用された助詞は見受けられなかった。

B. 助詞+動詞

～か知っていますか・・・～（を）知っていますか

これでいいですか・・・これ（が）いいですか

問題でありまして・・・～（が、は、に、も）ありまして

場所はいいんだけどね・・・～（が、で）いい

なんて思ったりします・・・～（と）思ったりします

・動詞等につられて、その動詞と共に起る助詞を使ってしまった誤りが多く見られた。

C. 語尾（活用）

静かで・・・静か（に、だ、な）

入るまえに・・・入（り）まえに

安いし・・・安い（で、て）

帰ろうと・・・帰（よ）うと

休ませて・・・休（む、み）せて

なりませんか・・・な（れ）ませんか

ふるそうです・・・ふ（り）そうです
 書けと言われました・・・書（く）と言われました
 おいしそうな料理・・・おいし（い）うな料理
 ひまなので・・・ひま（だ、に）ので
 読めない・・・読（ま）ない
 会えれば・・・会（わ、い）れば
 大事な用・・・大事（に、の）用
 えらそうなことばかり・・・えらそう（だ、に）
 出かけようとしたら・・・出かけ（ろ）う
 読めちゃいそう・・・読（む）

- ・動詞あるいは形容詞の誤用の傾向を分析しようと試みたが、上記のように誤答は多種多様であり特に顕著なものは見られなかった。

D. 他の表現

ある表現形式が、誤答によって異なる表現形式に変わった誤り

～をかけてきます・・・かけて（い）ます
 アルバイトっていえば・・・～っ（と）いえば
 終わりそうもない・・・～そう（に）ない
 手伝っていただけませんか・・・～ていただ（き）ませんか

- ・テープの音を聞き逃すなどした場合、知っている文法表現の中から適当と思われるものを推測して解答していると思われる。

5. 2. 5 誤答の数

「空欄+誤答」数

空欄と誤用を合わせた数の多い順に列記する。（ ）は「空欄+誤用」数。{ } は2つ以上数えられた誤答。
 A/B は SPOT の種類、数字は問題の番号を表す。

A - 51 早く国へ帰りたいなあなん（て）思ったりします。(42) {と、だ}

A - 15 好きな人（で）もいるの？(28) {に、て、が、の}

A - 32 出かけ（よ）うとしたら、電話がかかってきた。(27) {ろ、と、て}

A - 28 きょうはもうそのぐらい（に）して、早く帰ろう。(24) {か、を、と、ど}

A - 38 これはうちの問題（で）ありまして、そちらには関係のないことです。(24) {に、が}

A - 25 何やり始める（か）と思ったら、なあんだ。(23) {だ、た}

B - 43 手紙を早く出した（ほ）うがいいですよ。(23) {も、よ}

A - 43 今度のアパート、場所（は）いいんだけどね。(23) {が}

A - 49 それだけでは終わりそう（も）ないです

ね。(23) {は、に}

- ・ SPOT/A に関する誤りが圧倒的に多くみられた。
- ・ 「空欄+誤用」数が多く見られた項目は、本調査の誤用の分類でいうとほとんどが「文法・語彙」による誤りと考えられるもので、しかも全て文法による誤りであった。
- ・ 特に助詞の誤りが多くみられた。助詞の使い方はバラエティーに富んでいるため、その習得が容易ではないことが推測される。
- ・ 誤答の多かった7項目中4項目は、フォード・小林（1993）の「文法能力集団別の習得度の差」において、「G1G2間に顕著な習得度の差がある問題」に分類される。（G1は、筑波大学のプレースメントテストにおいて文法得点が上位25%の集団、G2は、得点が上位25～50%の集団）

6. おわりに

作文と SPOT との相関に関して、国内入試組と海外入試組とではかなりはっきりとした違いが見られた。違いの出た理由として推測される要因は前述したが、その要因をより検討するために2年程は調査を続けて分析を重ね、導入の可能性について検討していきたい。また、作文をいかに客観的に採点するか、という点も慎重に検討していかなければならない。

入試結果との相関についても、本稿では国内入試組と海外入試組の聴解力に差があるためと推測したが、この点も引き続き今後の検討課題としたい。

誤答の分析により、中国人留学生に多く見られる誤用の傾向を知ることができた。これらは今後、教室活動に有意な示唆を与えるものと思われる。

<参考文献>

- 小林典子・フォード順子（1992）「文法項目の音声聴取に関する実証的研究」『日本語教育』78号
- 小林典子・丹羽順子・山元啓史（1994）「日本語能力簡易試験としての「聞きテスト」－解答形式の漢字要因に関する分析－」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』9号
- 小林典子・フォード丹羽順子・山元啓史（1995）「『日本語能力簡易試験（SPOT）』の得点分布傾向－中上級向けテストと初級向けテスト－」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』10号
- 小林典子・山元啓史（1997）「日本語能力の測定－学習者特性と SPOT 得点の関係－」『日本語学習者に対するプレースメントテストとしての SPOT（Simple Performance Oriented Test） 研究成果報告書（2）』
- 小林由子（1998）「技能・レベル別クラスにおける SPOT の使用－北海道大学の場合－」『日本語学習者に対するプレースメントテストとしての SPOT（Simple Performance Oriented Test） 研究成果報告書（3）』

- 酒井たか子・フォード丹羽順子（1997）「オランダ・ライデン大学における SPOT の実施報告」
『日本語学習者に対するプレースメントテストとしての SPOT（Simple Performance Oriented Test）研究成果報告書（2）』
- 佐藤福子・谷口亮子（2003）「日本語学習者の表記における暗示的誤用訂正の試みー中国人留学生の誤りに着目してー」『金沢星稜大学論集』第36巻第3号
- 當作靖彦（1998）「文法項目の学習機会と習得の関係ーSPOTを通してみた文法習得度に関する考察ー」『日本語学習者に対するプレースメントテストとしての SPOT（Simple Performance Oriented Test）研究成果報告書（3）』
- 畑佐由紀子（1998）「プレースメントテストとしての4つの SPOT と文長の分析」『日本語学習者に対するプレースメントテストとしての SPOT（Simple Performance Oriented Test）研究成果報告書（3）』
- フォード順子・小林典子（1993）「日本語学習者による文法項目の習得に関する一考察ー文法能力集団別の習得度の差ー」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』8号
- フォード丹羽順子・小林典子・山元啓史（1995）「日本語能力簡易試験（SPOT）は何を測定しているかー音声テープ要因の解析ー」『日本語教育』86号
- 関光準（1996）「金北大学における SPOT」『日本語学習者に対するプレースメントテストとしての SPOT（Simple Performance Oriented Test）研究成果報告書（1）』
- 村上京子（1998）「名古屋大学における SPOT の実施」『日本語学習者に対するプレースメントテストとしての SPOT（Simple Performance Oriented Test）研究成果報告書（3）』

〈資料〉筆記試験スケール

（1）文法能力（0～3点）

- 個々の文についても，文章全体についても，執筆者の意図が明快到理解可能であるもの（文法・表記上の軽微な誤りや文体上やや不自然な点は許容する）。3点
- 文法・表記上明らかに適切でない点がかかり目立つが，文章全体から執筆者の意図は明快到理解可能であるもの。2点
- 文法・表記上明らかに適切でない点がかかり目立つが，文章全体から執筆者の意図は想像することが可能であるもの。1点
- 意味不明の文が多く，文章全体から執筆者の意図を理解することが不可能または極めて困難なもの。0点

（2）論理的能力

（0～3点）

- テーマに沿って構成，展開がきちんとなされ，意見，感想，描写等が明確に述べられているもの。3点
- テーマに沿って構成，展開がなされているが，一部に内容的矛盾や非整合性の存在するもの。2点
- テーマに沿った構成，展開が不適切，あるいは不十分であり，論理性・客観性を著しく欠いているもの。1点
- テーマに沿った構成，展開がなされていない，また執筆者の主張も不明であるもの。0点